



小口あや、二度目のステップス個展である。前回に比べると、圧倒的に作品に変化が生じた。これまでの小口を知っていた者も知らなかった者も、ちょっと他では見ることのできない作品群に驚いたと思う。

非常にグロテスクだ。デカダンス、バロック、幻想絵画的、シュールレアリスティック、様々な呼び名があるのだろう。有機的な色や形を乗り越えた、剥き出しの、生身の姿が迫ってくる。色を変えたらホラー映画のような、内臓的な世界観であるように見えてくるのかもしれない。

しかもこの作品は、途轍もなく大きい。小さい作品でも、細部までびっちり描かれている。画廊が異空間と化す。

恐らく小口は、そういった気味の悪いものをわざと描いたのではない。これまでどおり、身近な植物を、丹精込めて描いたのであろう。それでも何故、他者から見てグロテスクにまでなってしまったのであろうか。

それは小口が植物に、否、動物も、人間も、土も、空気も、水も、地球上の、大気圏内の、あらゆる存在が持つ「生きる意味」に到達したからではないかと私は想起する。「生きる」ことは美しさだけではなく醜さもある。それを「判定」するのは、その時の情勢によって大きく異なっていく。小口はそれほどまでに、真剣に、「生きる」ことに向き合っている。我々も見習わなければならないであろう。

